

高等学校における総合的な探究学習の時間が学生に与える影響

氏名 福本 勝信

指導教員 日下 勇歩

(要旨)

本研究は、高等学校における「総合的な探究学習の時間=以下、探究学習」が学生の主体的・対話的で深い学びの育成に有用であるのかを明らかにすることを目的とし、授業を経験した大学生と現役高校教師へのインタビュー調査を通じて、その有用性と課題を検討した。探究学習を経験した大学生と、それを指導する現役高校教師の双方の視点から、探究学習は学生にどのような影響を与えていているのか、また大学生は取組の効果をどのように捉えているのか、さらに現在その効果をどのように活かせているかをインタビュー調査結果から検証した。本研究の主な成果は以下の通りである。

大学生の視点からは、探究学習を通じて得た自主性や問題解決能力が、大学での課題解決やディスカッションにおいて非常に有用であったと評価していた。一方で、高校教師の視点では、探究学習の実践における指導上の困難さが強調された。教師は、生徒一人一人の興味や関心に応じた学習を促すことの重要性を認識しつつも、時間やリソースの制約、カリキュラムの枠組みの中でそれを実現する難しさに直面していると示唆された。また、両者の視点から共通点もいくつか確認された。まず、探究学習が学生の主体性や思考力の育成に寄与するという点では、大学生と高校教師の間に大きな認識の違いは見られず、学びの質を向上させるためには、教師の指導力や学習環境の整備が重要であるという点でも一致していた。これらの共通認識は、探究学習を今後さらに発展させるための基盤となり得ると考えられる。一方で、大学生と高校教師の視点にはいくつかの違いも確認された。大学生は、探究学習の成果が大学生活にどのように生かされたかという個人的な経験に基づいて意見を述べる傾向があるのに対し、高校教師は、教育全体の制度や指導方法の課題を包括的に捉えた意見を提示してた。この違いは、それぞれの立場が持つ役割や関心の焦点に起因すると考えられた。探究学習をより効果的にするためには、学習内容の深さや目的意識を高めるだけでなく、教師側の支援体制や評価方法の整備が不可欠であることが明らかになった。